

チーム医療の紹介

第2弾

緩和ケアチーム

看護相談室 / 知ってください緩和ケア

がん看護専門看護師 根岸 恵 (ねぎし めぐみ)

緩和ケアとは、重い病を抱える患者さまやその家族一人一人の身体や心などの様々なつらさをやわらげ、より豊かな人生を送ることができるように支えていくケアのことです。

緩和ケアの対象は、がん、慢性呼吸不全、慢性心不全、慢性腎不全などの患者さまとご家族です。

以前は、緩和ケアは病気の治療ができなくなった患者さまに対して行うものと考えられていました。しかし、今では、病気を治すための治療と一緒に緩和ケアを受け、よりよい状態で治療に励んでいる患者さまも増えており、治療のどの段階でも緩和ケアを受けることができます。

また、がん治療を終了した患者さまにおいては「緩和ケア病棟」で緩和ケアを受けることができます。

緩和ケアを受けたい患者さまやご家族は、主治医や看護師にご相談ください。



麻酔科 / いつでも、どこでも緩和ケアチームを利用できます

医師 木下 真弓 (きのした まゆみ)

緩和ケアチームは、痛みや息苦しさなどのつらい身体症状や、不安・落ち込みなどの精神的な苦痛を和らげ、がんや慢性疾患を抱える患者さまと家族がよりよい生活を送れるように支援するチームです。

当院では医師、看護師、薬剤師、理学療法士、管理栄養士がチームとなって、患者さまとその家族を支援しています。

入院中の患者さまに対しては、緩和ケアチームは月曜日の午後に各病棟で回診を行い、緩和ケアチームと主治医、病棟看護師が連携し、今後のケアについて一緒に考えます。当院で通院治療されている患者さまは、外来で緩和ケアを受けることができます。外来では内服薬・注射薬・貼付剤などの薬物療法や神経ブロックなどを組み合わせて苦痛症状の緩和を図っています。

また、緩和ケア病棟はがん患者さんを対象とした、からだと心の苦痛緩和を行う専門の病棟です。昨年は年間300名を超える患者さまが利用されました。

また、自宅で生活されている患者さまと家族が安心して自宅で生活できるよう、介護者が休息するための短期入院も利用できます。



栄養課 / 食べたい料理を選べる「かもめ食」を提供しています

管理栄養士 岩松 そのみ (いわまつ そのみ)

当院で提供している「かもめ食」とは、患者さま自身が食べたい料理をメニュー表から自由に選んでいただき、提供する食事です。緩和ケアの対象者を中心に、食欲が落ちて通常食が食べられない方に提供しています。ちらし寿司、お茶漬、酢の物、サラダ、シャーベットといったあっさりしたメニューから、ハンバーガー、カレーライス、しゅうまい、たこ焼きといった味のはっきりしたメニューなど、約60種類のメニューを常時準備しています。嗜好や状態に合わせて、口から食べることを楽しんでいただけるよう、支援していきます。



薬剤部 / 緩和ケアでの薬剤師の関わり

薬剤師 小林 大記 (こばやし だいき)

緩和ケアを必要とする患者さまは、さまざまな苦痛を抱えています。特にがんが進行していくと、強い痛みを伴うことが多々あります。その場合には鎮痛薬を使用していきますが、その中に医療用麻薬を使用することもあります。日本では、麻薬に対し、マイナスイメージがあり患者さまやご家族は不安を抱くこともあるため、それを払拭するのも薬剤師の役割の一つでもあります。

正しく使えば有効な効果をもたらしますが、副作用も現れます。薬剤師は、個々の患者さまに合わせた鎮痛薬の提案・投与量の調節、そして副作用が生じた場合の対応などを緩和ケアチームで共有しながら薬学的な面でサポートしています。



薬剤師による患者さまに合わせた薬の調節



管理表を用いて薬の提案・投与量の調節

リハビリテーション課 / 自分らしく過ごし続けるために

作業療法士 門馬 加奈子 (もんま かなこ)

患者さまとご家族の希望を十分に把握したうえで、できる限りその人らしく過ごしていけるよう関わることを目的としています。

具体的には、食事やトイレなど自分で行える期間をできるだけ延ばせるよう、動作方法の工夫や代替手段を検討します。また、徐々に動くことが難しくなってきた場合には、マッサージや姿勢を整えることで痛みや辛さを緩和して楽に休めるようにしていきます。

そして、緩和期でもリハビリを継続することは、モチベーションや活動の機会をつくることに繋がります。がんの進行に伴い、様々な症状や後遺症が出現する中で、その時期に合わせたリハビリテーションを行うことが大切です。身体だけでなく、精神面や環境、活動などあらゆる面から患者さまが自分らしく過ごせる時間をサポートしていきます。



移動、食事のサポート器具の提案



痛みに合わせて姿勢などの提案